學宮圖説譯注

学宮図説訳注

［明］朱舜水 著

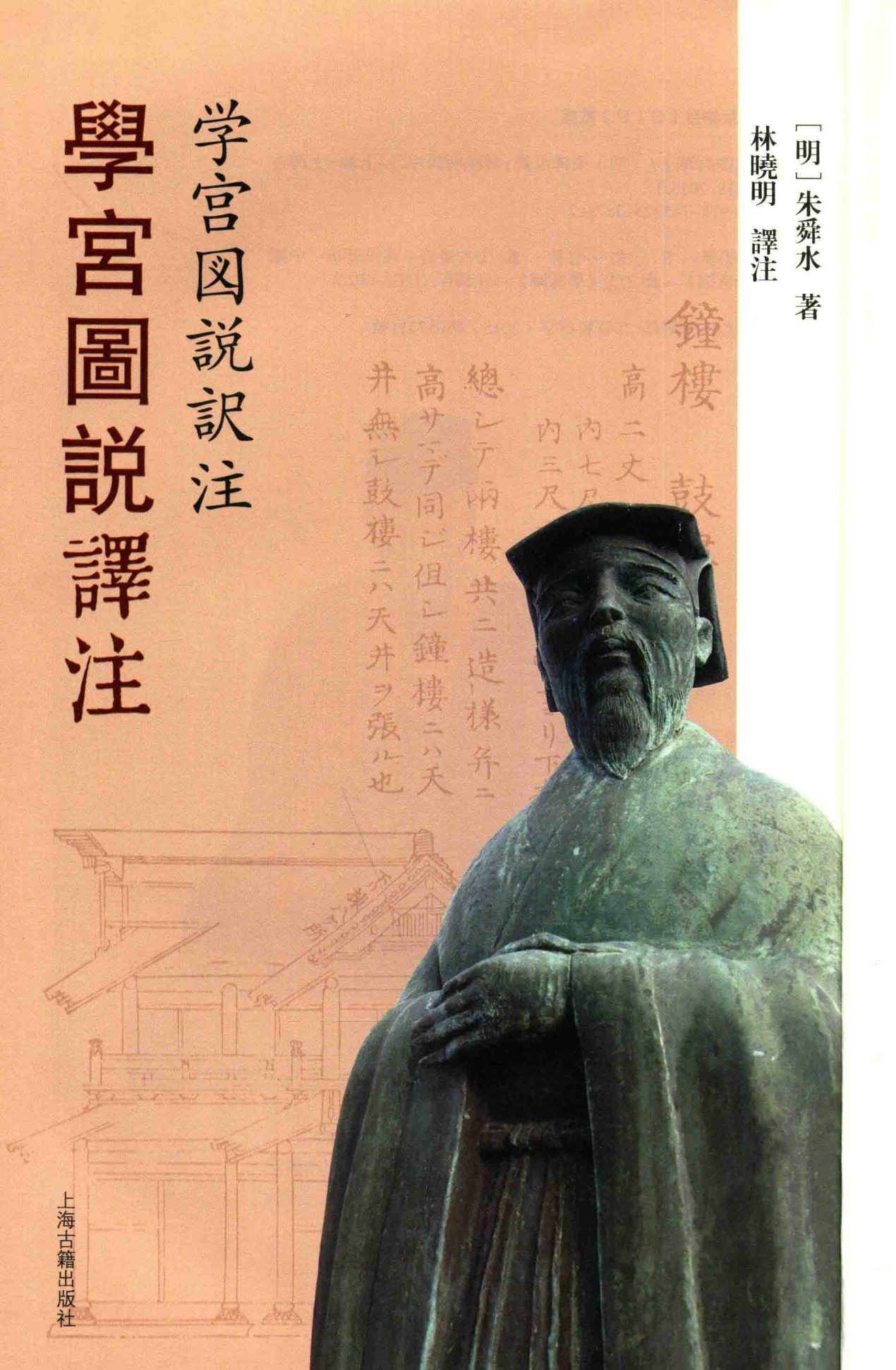
林曉明 譯注

上海古籍出版社

學宮圖説譯注

学宮図説訳注

［明］朱舜水 著
林曉明 譯注



上海古籍出版社

圖書在版編目（CIP）數據

學宮圖說譯注 /（明）朱舜水著；林曉明譯注. --上海：上海古籍出版社, 2015.3
ISBN 978-7-5325-7573-2

Ⅰ. ①學… Ⅱ. ①朱… ②林… Ⅲ. ①古建築—建築藝術—中國 ②《學宮圖》—譯文③《學宮圖》—注釋Ⅳ. ①TU-092.2

中國版本圖書館CIP資料核字（2015）第057311號

學宮圖說譯注

［明］朱舜水　著
林曉明　譯注

上海世紀出版股份有限公司
上海古籍出版社　出版發行
（上海瑞金二路272號　郵政編碼　200020）
（1）網址：www.guji.com.cn
（2）E-mail:guji1@guji.com.cn
（3）易文網網址：www.ewen.co

發行經銷　上海世紀出版股份有限公司發行中心
製版印刷　上海麗佳製版印刷有限公司
開　本　889×1194　1/18
印　張　24 4/18
插　頁　1 6/18
字　數　300,000
印　數　1-1,300
版　次　2015年3月第1版
　　2015年3月第1次印刷
ISBN　978-7-5325-7573-2/G・602
定　價　168.00圓

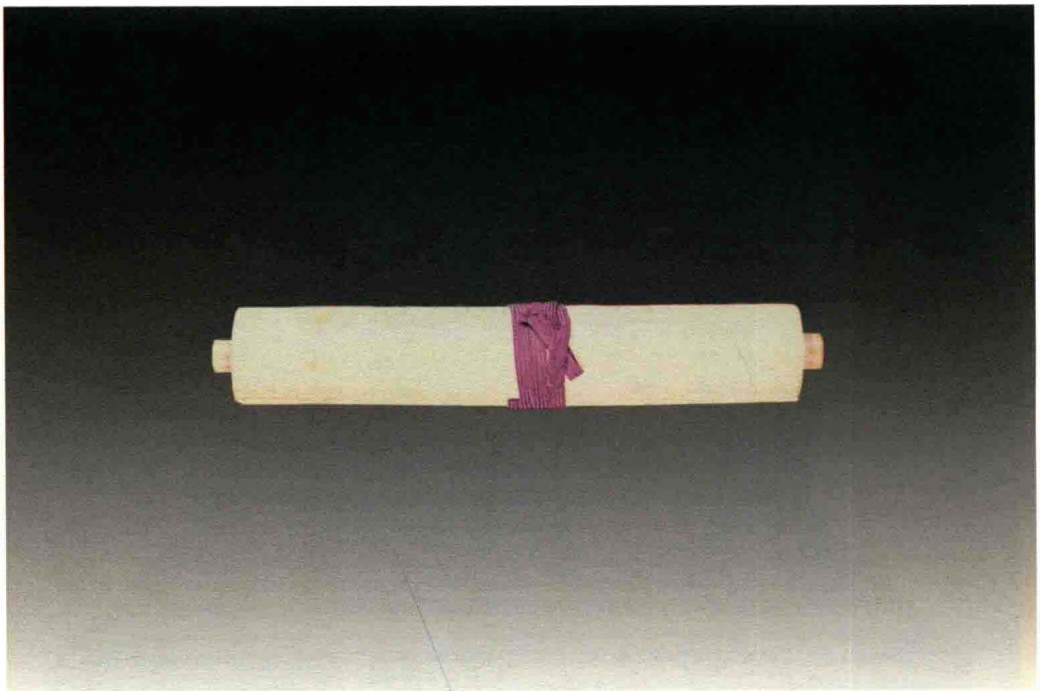
德川光國像（水户常磐神社義烈館藏）
德川光圀像（水戸常磐神社義烈館藏）

《舜水朱氏談綺》（福岡縣傳習館高等學校藏）
『舜水朱氏談綺』（福岡県伝習館高等学校藏）

《舜水朱氏談綺》（柳川古文書館藏）
『舜水朱氏談綺』（柳川古文書館藏）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

《舜水朱氏談綺》（柳川古文書館藏）
『舜水朱氏談綺』（柳川古文書館藏）



《朱舜水規划孔子廟樣圖》卷（玉川大學教育博物館藏）
『朱舜水計画孔子廟指図』巻（玉川大学教育博物館藏）

由朱舜水指導製作的大成殿模型（《至聖文宣王》中刊載的圖片）
朱舜水の指導によって作つた大成殿模型（『至聖文宣王』の中に掲載された写真）

學宮圖說譯注序

張立文

「日就月將，學有緝熙于光明。」長期堅持不懈地學習，就能積漸廣博而達光明境界。林曉明君立志於學，為研究朱舜水，他曾十渡日本，收集有關資料。若志不立，雖細微之事，猶無可成之理，況為之大事。一方面他以知命之年，刻苦學習日語；另一方面實地考察以體認朱舜水的事蹟和精神。故取得豐碩成果。

「身實學之，身實習之」。曉明君以其參加與主持松江地區古建築的調查、保護、修復工作和豐富經驗，以及其為古建築高級工程師的廣博知識，勇敢地擔當起當代舜水學界一般不敢涉及的《學宮圖說》詮釋工作。他以甚得天獨厚的松江地區的工作環境，與朱舜水曾在松江府學習二十年的經歷，加之明代末期，松江府學宮是中國東南一帶最具有特色的學宮，朱舜水在學宮的建築修理過程中，虛心向建築師請教，積累了高深的建築學宮的知識。古今兩人雖相隔三百多年，但舜水與曉明工作學習的地方相同，又其對古建築的濃厚興趣相同，因此兩人心有靈犀一點通。這是促使曉明君詮釋朱舜水《學宮圖說》的因緣。

《學宮圖說》體現了朱舜水以儒學為主旨的建築思想。學宮作為建築物，是設計師主體的智慧創造，通過建築師和工匠的實踐而物件化的物。主體的智慧創造並非憑空虛擬，一方面是對傳統建築學宮原理、規矩、範式的傳承；另一方面是根據不同的客觀環境的實際而予以創造；再一方面是把中國學校與孔子廟建築法式與日本建築相結合。從而有《學宮圖說》之作。

朱舜水熟諳宋代和明代的營造法式或《魯班經》等。《學宮圖說》中不僅有宋代和明代建築專業詞彙，而且建築寸尺的表述方法與《魯班經》同。然而《魯班經》為一般營造方法、建築風水學、室內傢具的製作方法，《學宮圖說》是闡述中國

明代州府學宮建築制度、營造方法的書，這是兩者之異。

「賢者處實而效功，亦非徒陳空文而已。」《學宮圖說》是學以致用的典範。亦是嚴遵儀禮制度的建築學的著作。《左傳・隱公十一年》記載：「禮，經國家，定社稷，序民人，利後嗣者也。」禮是管理國家，穩定社稷，使人民遵守秩序，有利於後來子孫。它要求人按照不同的等級的規定，而各安其位，各行其事，各盡其責，而不得僭越。

禮不僅要求人的一切行為活動符合禮，而且國家制度，百姓日用也要符合禮的規定。如季氏作為大夫，卻僭用天子八佾舞於庭之禮，孔子說「是可忍，孰不可忍也」。李覯說：「飲食、衣服、宮室、器皿、夫婦、父子、長幼、君臣、上下、師友、賓客、死喪、祭祀，禮之本也。」（《禮論》，《李覯集》卷一）。朱舜水《學宮圖說》規定：「大門。中門平時不可通行，僅限於祭孔子的牲口引入時可通行，平時通行之事限於東角與西角門。」學宮的建築物配置是按「左廟右學」制度，《周禮》尚左，明代中期以降，全國各地學宮左部配置大成殿。又重要建築的丹墀尺寸規定亦按禮的規定：「本堂丹墀深三尺，明倫堂丹墀二尺，啟聖宮一尺五寸。」表示三者等級高低之別。體現了禮的根本。

終身不脫依賴模仿，便斷然不能創新。朱舜水根據日本地震多發的實際，在《學宮圖說》中發明了專用於防震的「平震枋」。這在宋代《營造法式》中無，日本語中亦無。其製作方法是「穿臍入違」。即「防震枋」在安裝時，在建築的柱子中間從左右兩方穿入防震枋，以起防震作用，為保障生命財產的安全。

朱舜水的《學宮圖說》在日本產生了一定影響。建設學宮雖為水戶藩主德川光國的理想，但由於物力人力的限制而未實現，但德川光國要求朱舜水指導工匠製作大成殿、兩廡、門的模型。模型完成後，德川光國向朱舜水請教祭禮，即釋奠之禮。林曉明實地考察了八座日本古代學校（孔廟）。其中栃木足利學校，岡山閑谷學校、長崎中島聖堂建造年代較《學宮圖說》出版年代要早，唯東京湯堂聖堂，德川家齊於寬政十一年（一七九九）建造，設計時參考了朱舜水為德川光國製作的大成殿、兩廡、門的模型。另日新館、弘道館的大成殿是模仿《學宮圖說》的，是符合禮的。

《學宮圖說》譯詮的完成，恢復了明代學宮建築的法式，呈現了古代學宮建築所蘊涵的禮儀制度、審美情趣、學宮精神、舜水智慧，加深了對學宮在培養人的道德品質、精神修養、文化知識中的功能的體認，對現代學宮建築有參照和啟迪的

價值。

是為序。

二〇一四年五月廿八日

於中國人民大學孔子研究院

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

学宮図説訳注序

張立文

「日に就き月に将み、学びて光明に緝熙あり」とは「長期に渡るたゆまぬ勉強により、高い見識が養われ、光明の境界に達することができる」という意味である。林暁明氏は学問に志し、朱舜水を研究するために、十回も日本に行き、資料調査を行った。もし志がなければ、たとい小事であっても、成し遂げることはできない。まして大事なことだから、なおさらである。彼は天命を知るという年齢で、日本語の勉強に励んだ。また、現地調査を通して、朱舜水に関する事跡と思想を調べ、実り多い成果を収めた。

地道に学びながらその業務を実践する林暁明氏は古建築の調査、保護、修復を担当してそこから得た豊かな経験を基に、更に、古建築高級エンジニアとしての広い知識を持ち、これまで学界ではあまり触れられていなかった『学宮図説』の訳注に取り掛かった。

林暁明氏の仕事先は上海市松江区である。朱舜水もそこで二〇年間勉強していた。明の末期において、松江府学宮は中国南東一帯で最も特色のある学宮である。朱舜水は学宮の建築と修理の過程で、謙虚に建築家に教えを請い、深い学宮建築の知識を積み重ねた。二人の間には三百年間の隔たりがあるとはいえ、同じ場所で勉強し、同じ場所で働き、また古建築に同じく深い興味を持っている二人の心は相互に通じると言っても過言ではないだろう。それは林暁明氏に『学宮図説訳注』の着手を促したきっかけである。

『学宮図説』は朱舜水が儒学を旨とする建築思想の現れである。学宮は建築物として、設計者の知的創造であり、建築者と職人の実践により作り出されたものである。主体による知的創造は仮説・虚構ではなく、それは伝統建築学宮の原

理、しきたり、範式への伝承であり、客観的環境に応じた創造でもある。そして、中国古代学校、孔子廟の建築方法と日本建築との融合でもある。これもまた『学宮図説』という作品の縁起である。

朱舜水は宋代と明代の営造方式あるいは『魯班經』などに熟知している。『学宮図説』には宋代と明代の建築用語があるばかりでなく、建築寸法の表示も『魯班經』と同じである。しかし、『魯班經』は一般の営造方法、建築風水学、室内家具の制作方法であるのに対して、『学宮図説』は中国の明の時代の州府学宮の建築制度、営造方法を論述する本である。これはまた両者の違いである。

「賢者たるものは空文ではなく、実務に励み、その効果を重視しなければならない。」『学宮図説』は学んで実際に役立てる本の模範であり、儀礼制度に厳しく遵守した建築学の著作である。『左伝・隠公十一年』には「礼は国家を経し、社稷を定め、民人を序し、後嗣を利する者なり。」という一節がある。つまり、礼は国を治め、社稷を安定させ、人民に秩序を従わせ、子孫の益になるものである。また、礼は各階層の規定に従い、各自がその位に安じ、その仕事をし、その職務を全うし、それぞれの職責を超えてはいけないと人々に説いた。礼の規定では、人間活動が礼に合致しなければならないうえに、国家制度、百姓の日用も礼に合致しなければならないと説いた。例えば、季孫氏は大夫の身分でありながら、天子のまねをして八列の舞を行った。孔子は怒って「是れをしも忍ぶ可くんば、孰れをか忍ぶ可からざらん。」と批評した。また、李覯は「飲食、着物、宮室、器皿、夫婦、父子、長幼、君臣、上下、師友、賓客、葬儀、祭祀、これらは礼の本である」と語った（『礼論』，『李覯集』巻一）。朱舜水の『学宮図説』では、「大門、中門は普段通行できない。孔子に祭る牛を連れて入る時に限り、通行可能である。普段の通行は東の角門か西の角門に限る。」と規定している。学宮の建築物の配置は「左側に廟、右側に学堂」の規定に従った。「周礼」が左側をよいとし、明の時代以降、全国各地の学宮は本殿を配置するようになった。また、重要建築の丹墀の寸法は「本堂丹墀の深さ三尺、明倫堂丹墀二尺、啓聖宮一尺五寸」という規定に従った。

模倣追従ばかりでは、創造は到底できない。朱舜水は地震多発という日本の実情に応じ、『学宮図説』の中で、専ら防

震用の「平震枋」を考え出した。この単語は宋代の「営造法式」にもなければ、日本語にもない。その制作方法は「臍を通し、違に入る」である。つまり、「平震枋」を据えつける時、建築用の柱の真ん中に左右両側から「平震枋」を入れ、防震の役割を果たし、生命及び財産の安全を守る。

朱舜水の『学宮図説』は日本で一定の影響力を持っている。学宮の建築は水戸藩主である徳川光圀の宿願で、物力、人力の制限により実現できなかったが、徳川光圀は朱舜水に職人たちを指導させ、本堂、両廡、門の模型を完成させた。模型が完成後、徳川光圀は朱舜水に祭礼、つまり釈奠の儀式を習った。暁明君は実地調査を行い、日本の八つの古代学校（孔子廟）を考察した。そのうち、栃木の足利学校、岡山の閑谷学校、長崎の中島聖堂の建築年代は『学宮図説』の出版より早く、東京の湯島聖堂だけは、徳川家斉が一七九九年に建築したもので、設計の時、朱舜水が徳川光圀のために作った本堂、両廡、門の模型を参考にした。他に日新館、弘道館の大成殿は『学宮図説』を模倣したもので、礼に合致したものである。

『学宮図説訳注』の完成は、明代学宮建築の法式を再現し、古代学宮建築に内含された儀礼制度、審美趣味、学宮精神、舜水の知恵を呈し、人間の道徳品質、精神修養、文化知識の育成における学宮の働きへの認識を深め、現代の学宮建築に参照と啓発の価値がある。

これをもって序といたす。

中国人民大学孔子研究院にて

二〇一四年五月廿八日

學宮圖説譯注序

福岡大學教授　石田和夫

朱舜水（一六〇〇—一六八二），名之瑜，字楚嶼，晚號舜水，浙江余姚人。作為松江府諸生，舜水師事松江名儒朱永祐、張肯堂，工讀勤勉，舉為恩貢生。崇禎十一年（一六三八），以「文武全才第一名」薦於禮部。先後十二次授官，其均不受。崇禎十七年，清兵入關，次年南下江蘇、浙江，明朝滅亡。後長期從事抗清復明活動，隨鄭成功大軍北伐，欲收復大明失地。

北伐失敗後，一六五九年，舜水亡命日本。其在日本，初期居住長崎，又到過柳川。後水戶藩主德川光國聘其為賓師，移居東京（江戶）。德川光國開設彰考館，編纂《大日本史》時，主導該事業的就是以舜水以及安積覺為中心的弟子們。舜水在日本居住二十三年，對「水戶學」的形成有很大的影響，此外在各方面對日本社會也有很大的影響。還有，辛亥革命前後，康有為、梁啟超等學者赴日留學，獲悉了朱舜水的事蹟，他們歸國後將其廣為頌揚。被日本人讚譽為「勝國的賓師」的朱舜水，才終於被中國本土所了解。

作為約四百年前的日中兩國人民的深入交流的一個方面，朱舜水不但在思想、學術、文物、制度諸領域發揮了其傑出的才能。而且，在建築領域也留下了很大功績，《學宮圖說》就是其中之一。舜水向德川光國、藩儒，進而對建築技師（木工作頭）傳授中國學宮建造的技術、竅門、方法，繼而編輯成書，被運用於以湯島聖堂為首的日本各地的學宮建造中。

在今天談文理結合，從《學宮圖說》可以窺見朱舜水非常多彩的才能。遺憾的是，此書有一個很大的欠缺，即日中兩國的學者在解讀時都覺得極為困難。以江戶時代初期的古語寫成的建築學專著，事實上迄今為止，在日中兩國還沒有能具

備完全閱讀、詮釋此書的研究者。雖然在關於朱舜水的思想、學術研究方面積累了相當的成果，而在這一部分，尚處於空白狀態。那位來到這兒填補空白的人才終於登場了，那重要的人才正是林曉明。所著《學宮圖說譯注》踏出了值得紀念的第一步，用以打開朱舜水研究的新局面。這次有幸出版此書，喜悅至極。

安東省庵在柳川迎接過朱舜水。福岡大學人文學部位於離柳川相當近的福岡市中心，迎接了作為訪問研究員的林曉明，那是二〇一三年四月的事。從那時開始，大約一年間，他一心一意、專心致志的研究，激發了周圍的許多人。學宮這樣的精密的設計圖之原本是如何完成的？我對於建築全然是外行，對林君什麼貢獻也沒有，每次對他的指導，都讓我大开眼界。

在《學宮圖說譯注》中《朱舜水〈學宮圖說〉譯注餘論》以及《經考察的日本古學校與孔廟》兩篇論述也包含在內。這是現在日本各地八座古學校（孔廟）附屬博物館等設施，基於他自己在日本境內行旅中收集資料而完成的論證考述。

據稱在書中，承蒙水德川博物館、玉川大學教育博物館和柳川古文書館三所機構，特別賜贈了重要的研究資料。從這個意義上來說，《學宮圖說譯注》出版是日中兩國人民協同努力的成果。

本書的出版，不僅僅對日中兩國舜水學的發展作出貢獻。世界各地殘存的孔廟是無可爭議的世界之文化遺產。此書的出版，對於闡明孔廟的歷史意義，以及解決今後在維護、管理方面可能出現的問題，將無疑給予很大的啓迪。

二〇一四年八月十日

学宮図説訳注序

福岡大學教授　石田和夫

朱舜水（一六〇〇―一六八二）、名は之瑜、字は楚興、舜水は晩年の号、浙江余姚の人。松江府の諸生として松江の儒者朱永祐や張肯堂に師事した舜水は苦学の末に科挙及第、崇禎十一年（一六三八）第一位で礼部に推挙されるも、これを辞退。以後十二回に及ぶ招請もすべて拒否。崇禎十七年満州兵が中原に侵攻、翌年江蘇・浙江へと南下して明王朝は滅亡する。後長期にわたって抗清活動に携わり、鄭成功の北伐に従って明王朝の失地回復を図るもついに叶わなかった。

北伐失敗ののち、一六五九年に舜水は日本に亡命する。日本でははじめ長崎、ついで柳川。その後水戸藩主徳川光圀に賓師として迎えられて東京（江戸）に移る。光圀は彰考館を開き『大日本史』の編纂に取り掛かるが、その際事業を主導したのが舜水及び安積覚を中心としたその弟子たち。日本に居留した二十三年、水戸学の成立に大きな影響を与え、その他様々な面で日本社会に多大な影響を及ぼした。ちなみに勝国の賓師と日本中の人が讃えたこの朱舜水の存在が中国本土でやっと知られるようになったのは、辛亥革命前後、康有為・梁啓超等の学者が日本留学で舜水のことを知り、帰国後に彼の名を顕彰してからのこと。

約四百年前の国を超えた日中両国人民の厚い交流の一こまであるが、思想・学術、文物・制度あらゆる分野ですぐれた能力を発揮した舜水は、実は建築の分野でも大きな功績を残していた。『学宮図説』がそれである。徳川光圀や水戸藩士、さらには建築技術師等に中国における学宮建設のノウハウを伝授すべく編まれたこの書は、湯島の聖堂をはじめとして日本各地の学宮建設に活用されたのである。

今でいうなら文理融合、朱舜水の才能がいかに多彩であったかをうかがわせる『学宮図説』であるが、残念ながらこの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com